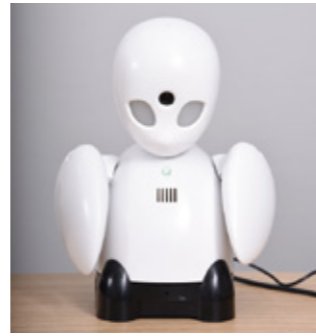


吉藤 健太郎

Kentaro Yoshifuji

オリイ研究所 共同創設者 代表取締役 CEO / ロボットコミュニケーター



その場にいなくても コミュニケーションできる 分身ロボットを研究開発

幼少の頃の不登校の経験から、その場にいなくてもコミュニケーションが図れる分身ロボット「OriHime (オリヒメ)」を開発した。能面のように無表情で動作も限られているが、ユーザーが自ら操作し、自身もロボットの近くにいる人も共に互いの臨場感を得られる小型ロボットだ。なぜ、開発したのか、何を狙っているのか。開発者でオリイ研究所を率いる吉藤健太郎 CEO に聞いた。

“心を運ぶ車いすをつくれないうか” という発想から OriHime が生まれた

—— 吉藤さんが分身ロボット OriHime を開発された経緯を教えてください。

吉藤 私は小学校5年生からの3年半不登校を経験し、天井を見続けるような生活を送って生きがいを感じられずにいたため、ある場所に体を運んでいくことができない、移動が難しいということが人間の社会活動に障害をもたらしていると感じます。障害というものをとらえるときに私は障害者手帳があるかどうかではなく、自分が何かをしたいと考えたときにそれを阻む障害があるかどうかで判断すべきだと考えています。そのため、外出困難というのは非常に大きな問題になってきます。それを突破するものとして、奈良県立王寺工業高校に入学した2003年から車いすを開発していました。しかし、車いすでも外出困難な人はいます。その場合どうしたらいいのかということで、体ではなく心を運ぶ車いすがつくれないうかとコンセプトを考えました。

—— 心を運ぶとは？

吉藤 心を運ぶとは、例えば友人の結婚式などに私が行けなかったとしても、出席した人たちが吉藤はいたと思えるようにすることです。そのためは、結婚式にいたという自分自身の感覚と、周りの人たちもそこに吉藤がいたと記憶している2つの条件が揃うことだと考え、それを実現できるツールをつくらうということで、私の「分身」をつくりました。分身ロボットと呼んでいますが、インターネットを介して操作できますし、これを使うことで吉藤がそこにいたと周りに思わせることも実現します。

—— それが OriHime というロボットとして具現されたわけですね。

吉藤 そうです。

—— 2010年に最初に制作された OriHime は2足歩行モデルでしたね？

吉藤 分身ロボットの存在を周囲から人として見てもらうために、何をもって人と認識されるのかを考えました。私は演劇や人形劇を観たりする中に、人がどんなところに命があると感じるのかに興味を覚えました。

オリイ研究所 共同創設者
吉藤健太郎 代表取締役 CEO

PROFILE

1987年生まれ。奈良県葛城市出身。高校時代に電動車いすの新機構の発明に関わり、2004年の高校生科学技術チャレンジ(JSEC)で文部科学大臣賞を受賞。翌2005年にアメリカで開催されたインテル国際学生科学技術フェア(ISEF)に日本代表として出場し、グランドアワード3位に。高等専門学校で人工知能を学んだ後、早稲田大学創造理工学部へ進学。自身の不登校の体験をもとに、対孤独用分身コミュニケーションロボット「OriHime」を開発し、多くの人に使ってもらうべく2012年に株式会社オリイ研究所を設立。自身の体験から「ベッドの上にいながら、会いたい人と会い、社会に参加できる未来の実現」を理念に、開発を進めている。